

新連載

# ニワトリの獣医師と呼ばれてたくて①

～一懸命から一生懸命へ～



白田 一敏

## ニワトリの獣医師と呼ばれてたくて

今から約二十五年ほど前、両親が養鶏場に住込みで働くことになり、東京から茨城に引っ越すこととなった。当時、筆者は野球少年だった。野球少年の筆者にとつて、引っ越した養鶏場の隣の大きな野球グラウンドはとてつもない喜びであった。そのグラウンドでプレーする時間は養鶏場にかかわる子供にはほとんど与えられないことなど当時九歳の筆者は知るよしもなかった。

両親の仕事は、鶏の育雛・育成であった。鶏舎は、養鶏経験の少ない方々には想像すらできないであろう「青空鶏舎」と呼ばれるものであった。育成鶏舎に屋根がない。ケージ上部の半分と餌樋をベニア板で囲って、最低限雨に濡れないようにしてあるだけなのである。当然床も舗装などしていない。直接地面であるから大雨の後は泥沼である。餌は一輪車を押して配っていた。『よくやっめていたな』とわが両親ながらしみじみ感心する。

数年後には現在の原型となる育成舎ができた。

さて、育雛・育成部門の仕事は、毎日の管理に加えて非常に大事な作業がある。そう、ワクチン接種作業やヒナの移動作業だ。小学校高学年ともなると、重要な戦力として頭数にカウントされる。もちろんこちらには不本意なのだが、いまだきの子供のように過保護ではない筆者には逆らうすべもない。土曜日の午後や日曜日どころではない。年末年始は貴重な作業日だ。ちなみに元旦は鶏痘ワクチン穿刺が恒例となっていたものである。

この頃は、子供が親の手伝いをするのは当たり前という良き時代で（この風潮がなくなつて以来子供の情緒が不安定になり情操に欠けるようになった、というのは筆者の僻見であろうか）、養鶏場の社長一家も総出でワクチン作業やヒナの移動、あるいは集卵作業を行っていた。

このワクチン作業や移動作業が、小学校から中学校にかけて、野球やサッカーをしていた筆者にとつて苦痛の最たるものであった。今もそうであるように試合は週末にある。

精一杯頑張つて、やっと選手に選ばれて『やっつてやるゾ』と張り切っている、夕食時に父からの無常の一言、「一敏、今度の週末は目薬（ILT）鶏伝染性喉頭気管炎の点眼ワクチン（ジョン）だぞ」。いつも目の前が真っ暗になったものだ。こんな時、普通なら両親に『俺、週末の試合に出るゾ』と威張り、喜んでもらえるのだからな…などと悲嘆に暮れたものだ。

ワクチン作業の苦労は実際に経験したものにしかわからない。とにかく、作業が単調。気が狂いそう。その頃には、鶏舎は現在の原型となる「のこぎり鶏舎」に進化していた。

子供の目には、この鶏舎はとにかく列が長いと映る。『本当に向こう側までたどり着けるのだろうか？』と気が遠くなるような思いだ。育成鶏は埃っぽい。目や喉が痛くなる。これに慣れると臭いに鈍感になる。臭いものを臭いと感じないのは良いことなのか、悪いことなのか？…

なかでも苦痛度の高いのが、ILT点眼作業だった。ILTワクチンは、それぞれに一滴点眼すればよい。大型のプラスチック製スポイトともいえる点眼器（現在でも当時と同

じ形のもが使用されている)が小学生である自分にとってはとても硬く、素早く一滴を落とすことができない。おまけに「父と筆者・社長親子でどちらが早く作業できるか」とくだらない競争なんぞするものだから、負けず嫌いの親父は、筆者が点眼液をこぼすたびにどやすし、競争に負けでもするとぶん殴る。今でいう虐待じゃないのかネ。

この光景を見た社長さんが、「よく頑張った」と言って、新しいグロブを筆者にプレゼントしてくれた。今でも鮮明に覚えている。親父より人様の方がやさしいなんて考えられますか？ 読者のみなさん!!

小学校のうちから作業を手伝っていると、段々に単調な作業でいかに気を紛らわすか、をも覚えてくるようになった。その頃になると、別なことでも面白くないと思うようになった。ワクチン作業や移動は、人手をかけて実施するものである。しかし、当時育成農場の責任者であった、場長と呼ばれる人は『やれ電話だ』、『客が来た』などといって作業を離れる。子供だつて嫌になる作業だ。場長の行為は、サボタージュにしか見えなかった。あんなズルイ大人に

なりたくないと思つたものである。

しかし、そんな暗黒のなかに、突然農場にニコニコしながらやつてきて、現場を一〜二時間ほど見て、責任者と話をするだけで、帰つてしまふヒトがいた。いかにも楽しそうな様子だ。あつちこつちの養鶏場に行つていろいろらしい。父に聞いた。

「あの人はだれ？」

「あれは獣医師だ」

と父が答える。

さらに、

「あの仕事は儲かる？」

## 少年時代の経験は貴重だった!

これからのストーリーで、大学時代の経験を紹介することもあると思う。その皮切りに、獣医学生でいかに産業獣医師になりたいと思う学生が少ないかを紹介しよう。

獣医師を目指す輩の中で、養鶏分野に進みたいという人間は残念ながらほとんどいない。つまりは養鶏場を実際に見たことのある獣医師、あるいは鶏を実際に触つたことのある獣医師は非常に少ないのである。

また、獣医学教育は、牛、馬、ブタといった大型の畜産動物、あるいは

と聞くと、

「儲かる」

と無責任に答える父。

その時、筆者の心は、将来獣医師になることに決まつたのである。後日談だが、自分ではあまり記憶にないのだが、その時現場で見た獣医師さんは、実はドクターKだった。

筆者が最初にお見かけした時は髪の毛は黒かつたと思うが、数年後改めて拝見した時は、真つ白であつた。実は苦勞の多い仕事であることを知つたのは後の祭りと言ふべきか!!

は犬、猫といった愛玩動物(最近ではコンパニオンアニマル、などと呼ぶらしい。筆者にはこうしたペットが宴会で酒を注ぐなどといった可愛い姿をとてもイメージできないのであるが)を中心に行つていられる機会がないのが現状である。

一方、養鶏業界では時代の推移に準じて、種々のワクチンが販売・普及し、衛生状況は種々の啓蒙によって向上している。飼養管理技術は、これまた種々の教育によって向上し

ているし、鶏そのものの性能は育種改良によって大きく改善されている。養鶏産業自体が大きな進歩を遂げつつあるのである。

当然、定型な鶏病の発生は少なくなつていゝ。従つて、獣医師が野外で実地に学ぶ機会も少ない。多くの獣医師にとって大学を卒業した時点ですでに教育とフィールドの間には、埋めきれないほどの差が厳然とあり、それは広がりつつあるといえるのである。

しかも、犬・猫といった愛玩動物の世界では、獣医師の顧客である飼い主は、むしろ素人であり、専門知

識を持ち合わせていることは少ない。しかし、養鶏業を営む人々はそれぞれが鶏と経営に関するオールラウンドの知識を有しているプロ集団なのである。筆者は、現在の職に就いて随分の期間、この差を痛感することになった。

筆者にとつての救いは、少年時代の経験であつた。例えば、現場を巡回していると、異常呼吸を呈する（奇声を上げて呼吸をする）俗に（鳴いている）という）個体を見かけることがある。こうした症例に遭遇した時、父親が「敏、見回りに行くゾ」といつて筆者を連れて真つ暗な鶏舎に入り、耳を澄ませたこと、「聞こえるか、カラスみたいに鳴いているだろ」と声をひそめて耳元でささやいた父の低い声……。父と静かに（鳴いている鶏を観察した）記憶が体のどこから甦つてくる。筆者にとつては、何ということもないことであるが、経験の浅い現場のスタッフでは、全く気がつかないことも多いようだ。

このような類のことは、他にもたくさんある。産業構造・鶏舎システム・鶏種・飼養管理などの変遷など枚挙に暇がない。時の流れは遡つて

は体験できない。生まれた時からカラーテレビがあつた筆者たちの世代にとつて、すべての判断基準がデジタル思考（在るか無いか、あるいは、〇×）でできている。それはあるいは教育制度の責任かもしれない。それに反して、養鶏業は生き物を飼うから、アナログ思考を絶対の条件とする（もつとも、養鶏に限らず、すべての社会現象や活動はアナログで動いていることに最近気づき始めた）。

獣医師であるから、当然、現場で病気が否かを判断する。不幸にして伝染病であると診断された場合、今後の被害を予測する。今後の対策を提案する。こういった獣医師の仕事には経験に裏打ちされたアナログ感覚が絶対の条件である。この十年間、養鶏産業界にプロとして従事してみ、少年時代の暗く重苦しい体験が、種々の経験と網の目を構築し、脳神経におけるシナプスのように次第にその網の目を広げているような気がするこの頃である。

（筆者・(株)ピーピーキューシー 品質管理&生産管理部門長／獣医学博士／獣医師）